

令和 3 年 6 月 22 日現在

機関番号：14602

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02414

研究課題名（和文）出版流通史的分析による近代奈良県の書物文化環境の解明

研究課題名（英文）A Study of Cultural Environment of Books in Modern Nara Region by The Method of Publication and Distribution History

研究代表者

磯部 敦 (Isobe, Atsushi)

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：00611097

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近代奈良県における書物文化環境を明らかにすることであった。そこで、幕末から戦後直後あたりを時間的範囲として、現奈良県領域に所在した印刷業者、流通業者、出版業者、小売業者、蔵書家など書物・新聞・雑誌の生産・流通・需要に関わる人びとの一覧を作成した。それを時系列で配置することにより、彼らの盛衰を一目に把握できるようにした。これによって、地域における書物等の受容環境、関係業者の活動時期を容易に把握することができるようになった。また、地域をまたいで活動も明らかにすることができるようになり、本研究をとおして近代奈良県における書物文化、および関係業者交流の実態を可視化することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、近代奈良県に所在した印刷業者、出版業者、流通業者、小売業者、蔵書家などを一覧化したことにある。これまでの地方出版史研究において、ある特定の地域における特定の業者を対象とした研究はあったものの、地域全体をとおして、また地域間の交流も含めて明らかにした研究は皆無であった。本研究は近代奈良県全域を対象としており、今後はこの一覧をふまえて地域の特性を考察することになるだろう。本研究の社会的意義は、上述の一覧をウェブ上で公開したことである。これにより、誰もがアクセスし閲覧することが可能となる。また、ウェブ公開により随時の増補改訂が可能になり、常に最新版を提供することが可能である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the cultural environment of books in modern Nara region. Therefore I created a list of printers, distributors, publishers, retailers, and book collectors, located in the area of present Nara Prefecture from the end of the Edo period to the period immediately after the World War II. By arranging them in chronological order, we were able to grasp their ups and downs at a glance. This made it possible to easily grasp the environment for receiving books, etc. in the area and the activity period of related companies. In addition, it has made it possible to clarify activities across regions, and through this study, we have been able to visualize the actual state of book culture and related dealer exchanges in modern Nara region.

研究分野：書物文化研究

キーワード：出版史 印刷史 流通史 書店史 地域史 書誌学 史料論 奈良県史

1. 研究開始当初の背景

出版史研究における「出版」とは、ある出版業者がなんらかの書籍なり雑誌なりを刊行したという狭義の営為のみを意味してはいない。「出版」とは、その書籍なり雑誌なりの原稿が作られ、編集され、印刷され、製本され、刊行され、そして流通し、排架され、購入され、読まれるという、その一連の連環構造において捉えるべき現象であり、その総体をあらわす学術用語である。そうした視座からの成果として、鈴木俊幸『書籍流通史料論序説』(勉誠出版、2012)や和田敦彦『読書の歴史を問う 書物と読者の近代』(笠間書院、2014)などの著作の公刊、また日本近代文学会の2016年度秋季大会における特集テーマ「流通する書物の近代 変動期に於けるネットワーク形成と文化」などからその動向がうかがえる。これらの研究動向をふまえて本研究が問題として指摘しておきたかったのは、ではその連環構造に対してどのような史料からアプローチしていくのか、ということであった。かつては出版物の時系列的把握から始まり、出版広告や関係者の伝記資料、そして近年では行政への提出文書などが実態把握の出版史料として注目されてきた。しかしながらこれらの方法は、出版物の作製面においてはきわめて有効であるものの、その出版物がどのように流通し、どこにどのように排架され、どのような人びとがその出版物と接触可能であったかという流通・受容のフェーズには対応できず、これらにアプローチするためには新たな史料の発掘、および従来の史料の再検証がなされねばならなかった。加えて、従来の出版史研究は東京や大阪など大都市中心の検証であった。出版流通や図書館政策が国策の一環としてもある以上、こうした研究状況は必然と言えなくもないのだが、一方で、ではその政策にどのように対応していったのかという個別具体の状況や特徴検証については、大きな研究課題として残されていたのである。なおいま、なんの注釈もなく「地方」という語を用いたが、この呼称には「中央」への憧憬や批判等を内包した、バイアスのかかった用語でもある。しかしながら、そのようなバイアスもまた対象地域の特徴であるならば、「地方」を積極的な意味において使用していくべきだろう。本研究は、そのような意味において「地方」出版史研究の一環として位置づけてもいる。

2. 研究の目的

上記の研究状況をふまえ、本研究では、幕末から戦後直後あたりを時間的範囲として、現奈良県域における印刷業者、製本業者、出版業者、流通業者、小売業者、図書館、蔵書家等の網羅的把握を試みた。これには大きく、

- (1) 奈良県域における出版流通の実体を解明する基礎データを提供すること
- (2) 地方出版史研究のための史料を批判的に検証し有効性と限界を見極めること

という二つの目的がある。

(1) について、奈良を対象としたのは磯部(研究代表者)の所属校(奈良女子大学)が奈良に所在するという地理的理由に拠るが、近隣の大阪や京都、和歌山等に比して行政文書や近代刊本の残存状況が必ずしも良いとは言えない奈良にあっては、そのこと自体が史料の有効性や限界が先鋭的にあらわれるのではないかと、これまで利用されてきた史料の再発見、見過ごされてきた史料の新発見の契機にもなるのではないかと期待もあった。また、ここでいう基礎データとは出版流通関係者の一覧化を指すが、こうしたデータは、これまでの研究では作製されてこなかった。たとえば、ある地方の出版史的「特徴」は何かということを考えたとき、まずどこに目をつけたらよいらうか。その地方で最初に出版された雑誌だらうか。あるいは今でも営業を続けている出版社や印刷会社だらうか。それとも、その地方でよく売れた書籍や雑誌だらうか。どこに目をつけるにしても、検証の始まりともいべき基礎データがなければ、最初の一手は恣意的にならざるをえない。つまり、基礎データを公開するということは、今後の研究のベースキャンプを作るということでもあるのだ。

(2) については、その史料から何がどこまで分かり、どこから分からないのかという点とセットで検証する。本研究は奈良を対象としているが、本研究での知見を他府県で応用する場合、汎用性の観点からの措置である。これもまた、今後の研究の土台作りを兼ねている。

3. 研究の方法

上記「研究の目的」をふまえ、本研究では以下の史料を次のような方法から検証した。

(1) 出版史料に関する個別具体の検証

奈良女子高等師範学校図書館旧蔵(現奈良女子大学学術情報センター所蔵)『図書原簿』の出版史料的検証

図書館の財産台帳である『図書原簿』には、書籍の購入先、購入額、排架先が明記されており、その意味において『図書原簿』は書籍や雑誌の流通実態が明記された貴重な出版史料とも言える。従来の出版史研究においては等閑に付されてきた史料を分析し、奈良女子高等師範学校における書籍移動を検証した。

奈良県立図書情報館所蔵『奈良県風俗史』の出版史料的検証

大正大礼記念行事の一環として編纂された『奈良県風俗史』は、県内各地域の風習や歴史的建

造物などが記された郷土民俗史料であるが、そのなかに地域で購読されている新聞や雑誌、蔵書家名も記されている。従来は民俗史料として利用されてきた『奈良県風俗史』を、本研究では書物文化史的側面から検証することとした。

奈良県立図書館所蔵行政文書の出版史的検証

出版御届や組合設立など行政への提出文書をファクトベースの出版史料として利用することは、つとに稲岡勝「金港堂「社史」の方法について」(『出版研究』12、日本出版学会、1982.2。のち稲岡勝『明治期出版史上の金港堂-社史のない出版社「史」の試み』(皓星社、2019)収録)が指摘するところであるが、本研究においても基礎調査の一環として奈良県立図書館所蔵県庁文書の調査をおこなったが、本研究では、従来のように出版届出文書のほか、図書館や教科書に関連する文書、私家文書所蔵の領収書等もあわせて調査・撮影をおこなった。

(2)『近代奈良県書物文化環境一覧』の作成と公開

上記「研究の目的」で述べた基礎データとして、作成・公開した。データ収集は、

出版物の奥付に記載された出版元・印刷所の名称・代表者・所付を入力

奈良県立図書館所蔵の各種史料より印刷業者・出版業者・小売業者等を入力

近代奈良県発行の新聞・雑誌掲載広告や出版関連記事を入力

することを主たる方法とした。

申請段階では業種の明記を予定していたが、出版業者が印刷業もおこなっているなど一人一業種に絞れないこと、史料からはどれが主業種なのか判断がつかない場合が多いこと、すべてを明記していくと煩雑になること、などの理由から業種の明記はおこなわなかった。

4. 研究成果

上記「研究の方法」をふまえ、本研究では以下のような成果をあげた。

(1) 出版史料に関する個別具体の検証

奈良女子高等師範学校図書館旧蔵(現奈良女子大学学術情報センター所蔵)『図書原簿』の出版史的検証

これについては、「出版流通史料としての図書原簿」と題して勉誠出版刊『書物学』18号(2020年7月)に本研究で得た知見を公開した。先述のように図書原簿には購入先や購入額、排架先などが明記されており、対象図書館をとおして所在地域の書物や雑誌の流通を把握しうる好個の史料である一方で、誰がその書物を何のために注文したのかなどの詳細までは知りえないという史料的限界を指摘した。図書原簿は財産台帳であるがゆえにおいそれと閲覧できるものではないが、それゆえに従来の出版史研究においては等閑に付されてきた史料でもあった。しかしながら、蔵書形成過程や図書館周辺の出版流通を考察するうえでは欠かせない史料であり、今後の地方出版史研究においては閲覧すべき史料の一つになると思われる。

奈良県立図書館所蔵『奈良県風俗史』の出版史的検証

現在、『奈良県風俗史』は奈良県立図書館まほろばデジタルライブラリーで公開されている地域のものをダウンロードするところから始めたが、『奈良県風俗史』における一部の記述を対象としていることから、下記『近代奈良県書物文化環境』に入力していくこととした。本史料の特徴は、奈良県内各地域においてどのような新聞や雑誌が購読されていたのかが一目で分かる一方で、どの家々でという個別具体の事情は一切分からないという史料的限界が指摘できる。また、大正大礼記念事業の一環として編まれたものであるため、その後も継続しておこなわれたものではなく地域内の変遷を追うことはできないこと、そして県外他地域でこのような事業がおこなわれた例はなく、奈良県においてのみ有効な史料であるといった特徴もあわせて指摘しておきたい。

奈良県立図書館所蔵行政文書の出版史的検証

吉野印刷株式会社に関する設立文書、県内諸地域における図書館閉館文書および付載の蔵書目録、私家文書における領収書、購読紙等の調査・撮影をおこない、下記『近代奈良県書物文化環境一覧』に反映した。

本調査における新たな知見として、罫紙の出版史的価値を指摘しておきたい。出版史料として行政文書を見た場合、これまではその内容のみが検証の対象であったが、本調査では罫紙にも注目した。具体的には、罫紙に刷られた印刷所名をデータとして蓄積していくことで、当該印刷所が地域内で活動していたのか、それとも地域をまたいで営業をおこなっていたのかといった商圏を明らかにしうる史料として活用できる、というものである。印刷所名が刷られていない一般罫紙は考察対象外となるものの、役場の罫紙印刷に関与することは印刷所経営の安定にもつながるものであり、罫紙記載の印刷所名は新たな出版史料として今後も注目していきたい。

(2)『近代奈良県書物文化環境一覧』の作成と公開

上述の諸調査、そして奈良県内で刊行された出版物、チラシの奥付や新聞記事等を入力した「近代奈良県書物文化環境一覧」を、奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所なら学術センター紀要『なら学術報告』4号(2020年9月)に掲載した(<https://opac2.lib.nara-wu.ac.jp/webopac/TD00275412>)。その後、本研究費を用いて冊子を作成し、奈良県地域史研究者、出版史研究者らに頒布した。版下は『なら学術報告』掲載データを用いたが、700頁に及ぶことから冊子は20部のみで作成とした。その後、誤記訂正と未入力記事の増補をおこない、2021年3月31日に「近代奈良県書物文化環境(202103増訂版)」をResearchmap資料公開ページで公開した(<https://bit.ly/3iaM31Z>)。今後のさらなる増訂を見据え、テキストデータでの公開

とした。

出版史研究におけるこの一覧の位置づけは、文字どおりある地域の出版関係業者たちを一覧化したことにある。ある限られた時期の組合名簿などは史料として備わるものの、それは限られた時期の限られた業種についてのみであって、出版に関わる業者すべてを対象とし、種々の史料を時系列に並べたものはなかった。先にも述べたように、地域的特色を検証するにあたっての対象選出は恣意的にならざるをえなかったのである。それが、この一覧によって、エビデンスに基づいた検証対象の選出が可能となった。御所や五條、桜井、大和高田、天理、大和郡山、奈良市といった物流の要所は印刷出版業者が多いこと、高取では薬や化粧品の引札印刷との関わりにおいて印刷業者が多かったこと、明治初期の教科書流通においては名望家が印刷や流通に関与していること、などである。今後はこのデータに基づいてより具体的な検証をしてくことになるし、実際、2021年度～2024年度の基盤研究(C)「近代奈良県における書物文化環境の実態解明」(研究代表者：磯部敦)は、本研究の発展課題として位置づけている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 磯部敦, 片島空, 古石春佳, 河野真邑子, 坂本真莉子, 佐藤さくら, 中村栄理子, 西谷明日香, 宮永莉帆, 室山知空, 山崎紫野, 涌嶋美月	4. 巻 2
2. 論文標題 奈良女子高等師範学校報国会図書 - 文学部図書室残存分の目録と紹介 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『なら学研究報告』（奈良女子大学大和・紀伊半島学研究所なら学研究センター）	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 磯部敦	4. 巻 18
2. 論文標題 出版流通史料としての図書原簿	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 書物学	6. 最初と最後の頁 60-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 磯部敦	4. 巻 21-12
2. 論文標題 体験としての『大和古寺風物誌』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 月刊大和路ならら	6. 最初と最後の頁 38-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 磯部敦	
2. 発表標題 澤田四郎作と検閲意識	
3. 学会等名 内務省委託本研究会	
4. 発表年 2018年	

1. 発表者名 磯部敦・柴野京子・飛鳥勝幸・中村健
2. 発表標題 出版資料としての名寄せ（ワークショップ「出版創業・独立史データベースの共同制作に向けて」のうち）
3. 学会等名 日本出版学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 磯部敦
2. 発表標題 澤田四郎作の賞為 - 澤田文庫調査から見えてきたこと -
3. 学会等名 京都民俗学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 鈴木健一編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 355（担当箇所はpp.176-197）
3. 書名 明治の教養 - 変容する 和 漢 洋 - （うち「ポッケと修養 - 明治期『菜根譚』出版の後景 - 」を 分担執筆）	

1. 著者名 日本出版学会関西部会編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 出版メディアパル	5. 総ページ数 134（担当箇所はpp.107-130）
3. 書名 出版史研究へのアプローチ - 雑誌・書物・新聞をめぐる5章 - （うち第5章「書物を誌す - 出版史と書誌学 の交錯をめざして - 」を分担執筆）	

1. 著者名 日本近代文学会関西支部編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 田畑書店	5. 総ページ数 388
3. 書名 異なる関西 分担執筆「言説としての奈良」	

1. 著者名 鈴木健一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 384
3. 書名 輪切りの江戸文化史 分担執筆「明治二十年 - 大量即製時代のはじまり - 」	

1. 著者名 田中祐介、柿本真代、河内聡子、新藤雄介、中村江里、川勝麻里、大野口ベルト、中野綾子、康潤伊、堤ひろゆき、徳山倫子、磯部敦、高媛、大岡響子、宮田奈奈、西田昌之、松園斉、島利栄子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 笠間書院	5. 総ページ数 568 (担当 : 365-393)
3. 書名 日記文化から近代日本を問う - 人々はいかに書き、書かされ、書き遺してきたか -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------